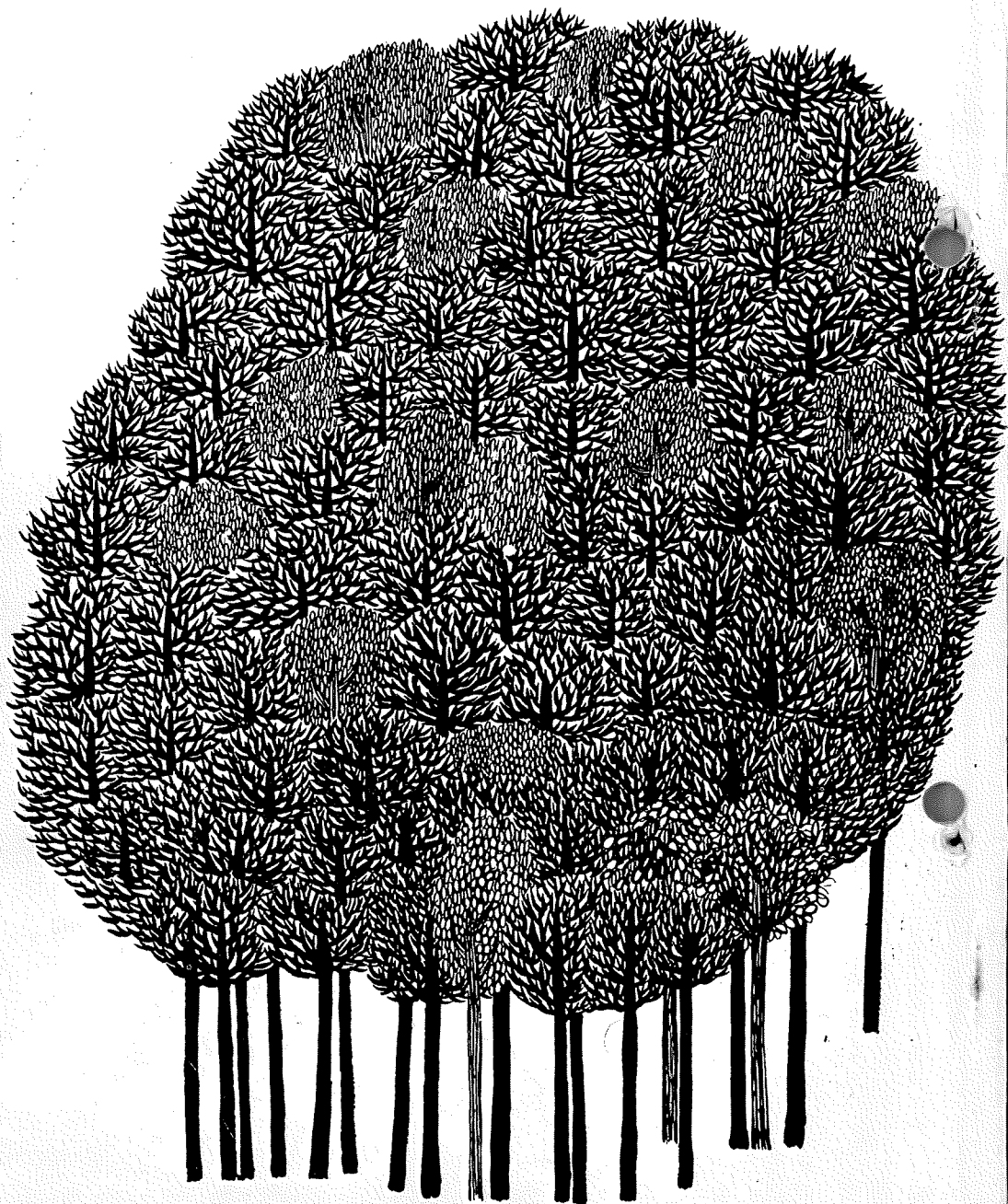


# 成蹊会誌

1964年8月第

23号





## 南および東南アジアへ旅して

広野良吉

米国アジア財団と日本政府外務省経済局の好意ある御支援により、昨年大学の夏休中二ヶ月に亘り、印度を訪問し、研究ならびに講演をする機会を得ました又本年三月約三週間余に亘り、日本政府外務省経済局の依頼でインドネシア、パキスタン(東西)マレーシア、フィリピンへ講演旅行する機会を持ちました。ここでは、これら二つの南および東南アジア諸国への旅行で見たこと聞いたことの内、旅行目的の問題と直接関係のないいくつか興味ある点について旅行日誌を追いつながら書いていこうと思います。

昨年七月十四日フランス航空で東京国際空港を旅立ちました。

東京からの連絡に手違いがあつて、其の夜十時半頃印度ニュー・デリーの国際空港に到

着した時には出迎えの方がおらなかつたのです。フランス航空のリモジンンに乗って、ムツとする夜のニュー・デリー街を走り、同席のルフトハンザ勤務のドイツ人と話しながら、予約済のプロードウェイ・ホテルに到着したのは十一時を過ぎておりました。其の夜の印度のタクシーに始めて厄介になつたのです。外貨不足ならびに工業化促進に重点をおいている低開発国ならびにはみられないひどい車でした。しかし道路が広く夜は人通りも少ないので、東京に来る外国人が、いような「神風タクシー」に伴う危険はありませんでした。後日知つたことですが、タクシーには東京と同じように最低料金があり、それは〇、七ルーピー(一ルーピーは七十五円)でした。

翌朝五時頃目を覚ますと、外は既に明るく窓越しに外の大通りと公園をみて驚いたことは、四五十人が道路わきや公園の中で裸に近い恰好で寝ていることでした。離日前に印度についてはアジア財団および外務省の方々から少々聞いておりましたが、今それを目前にみると驚愕せざるを得ませんでした。しかしこれも後日バンジャブ州チャンディガール市にあるバンジャブ大学の来客用ホテルで自分自

事の一つは、ホテルの自室に朝早く持つてきてくれるモーニング・ティでした。朝食前の一仕事がある場合、早朝の紅茶とビスケットのよき味と香りは今でも舌に残っているようです。

私は印度のインテリが議論好きだということを知り、シカゴ大学院在学時代から知っておりましたが、今度はその事を滞印六週間の間に心ゆくまで体験しました。私も議論は嫌な方ではありませんので、同席の日本大使館員が私のインタービューは何時も興味満々だと冗談をいっておりました。議論をしていても感じたことは、一つは議論当事者のより完全な意思疎通のために言語障害があつてはならないということ、他は議論の中心問題の前提—私の場合ですと印度の経済、政治、社会一般についていくらず予備知識をもって行つても多すぎることではない、ということでした。

ニュー・デリー滞在中、夕食は殆んど毎回招待されましたが、或る晩日本大使館の服部公使—現在は駐イスラエル大使になつていますが—が、現在他大使館員の方々と一緒にニュー・デリーで最もおいしい料理をだす中

身体験してわかつたわけですが、道路や公園で寝る人々は何も家がない浮浪者だけではない、家に冷房がない一般人が涼しく夜を過ごす為であるということです。彼等は一般にたをあんた軽いコットを家に備えておき、毎夜雨がふらない限りはそれを外に出してそこに寝るといふわけですね。

其の日、私の毎日の行動をより容易にするがために、コノート・ブレースというニュー・デリーの中心街の近くにある印度連邦政府所有のジャンパス・ホテルに移りました。このホテルはプロードウェイホテルに比べる、ずっと新しく近代的な大きなホテルですが、客扱いにおいて、やはり官僚的なところがあるように感じられました。勿論政府所有であっても経営は民間ホテル業者に委ねられており、その点政府経営でないことにより救われたかも知れませんが、なおかつ従業員にサービスピ精神が欠けていることが特に最初の数日間私の気持ちをいらだたせました。

そこで早く帰日したがっていたその大使館員にそのことを申すと、信じられないという顔つきをしておりました。それにしても、印度に来て心をやわらげてくれる日常の出来

### 随筆・紀行文

国料理店に行きましたが、印度は中国との国境紛争に入り未だに緊急令下にあつたにも拘らず、多数の印度人が料理店に来て会食していることにまづ驚きました。聞きました所では、国境紛争がおきた後何処の都市でも印度人による中国人に対する暴力行使は殆んどなかつたようです。さすが、ガンジーの無抵抗主義が徹底した国だと思つた。其処で次に驚いたことはその料理店の名前が「ミカド」であつたこと、中印紛争がおきて間もなく日本の「おしぼり」を食前に出すようになったことです。これはたつた一例ですが、在外華僑が如何に商売のために融通性を備えているかをよく表わしており、又それ故にこそ東南アジアでは華僑はかくも伸びてきたのであると痛感せざるを得ませんでした。

全部で六週間の印度滞在でありましたが、この間、私は各地で大学を始め研究所、官公庁、経営者団体、労働組合および企業を訪ね、責任者、専門家と討論を重ね、又そのような団体主催で講演をして廻りました。其の様な講演および議論の場で知り常に驚いたことは、印度の各界インテリ層が同じアジアの日本に対してもっている認識は大きくかつ好意

的であり、又アジア諸国の経済開発、平和維持に果す日本の役割について大きな期待をもっているということでした。チャンディガールで私を案内してくれたバンジャブ大学の政治学部の一講師は、第二次世界大戦において日本の軍国主義政権のもとで帝国主義国としてアジアの諸国に侵略したのは欧米の植民者と同様非難されるべきであるが、欧米植民者をアジアから追放して民族独立のきっかけをつくらせてくれたことは大変嬉しかったといつていました。反省と同情が混合した彼と同じ意見は、今年の南東南アジア四ヶ国講演旅行の場合にも屢々耳にしました。この意見は慎重に考慮すべき問題ですが、それにつけても、印度人に限らず他のアジア諸国の人々が戦争中の苦い体験にも拘らず日本人に好意的であるという印象を持ったのは私丈の印象ではないようです。又同時に彼等の日本に対する期待は大きく、それに日本が答えてきたかどうか甚だ疑わしいと思つた。私は欧米文に目を奪われず、経済的にも政治的にも、もっとも南・東南アジアに目を向けるべきではないでしょうか。最近の国連貿易開発会議や、不幸なことであるけれどもラオス情勢、インド



座間アメリカン・ハイスクール主催、本校から二十三名参加。  
 ○PTA総会（五月二十三日）  
 会長に猿山昌平氏（再選・実務九回卒）が選出された。

中学校

○成蹊小学校よりの進学者推薦会議（一月二十八日）  
 推薦者 一二八名（男子 一〇三名 女子 二五名）  
 ○入学試験（二月四日・五日）  
 一年生 男子 女子 計  
 志願者 一八八名 八四名 二七二名  
 受験者 一七三名 七二名 二四五名  
 欠席者 一四名 一三名 二七名  
 合格者 一〇九名 三五名 一四四名  
 ○高校への推薦会議（三月六日）  
 高校へ進学推薦者 男子 二一〇名 女子 四九名  
 仮推薦者 男子 四名 合計 二六三名  
 外部進学者 男子 一一名 女子 五名  
 合計 一六名  
 ○第十七回卒業式（三月十八日）  
 卒業生 二七九名（内女子 五四名）  
 ○入学式（四月八日）  
 一年生 二六五名（内女子 五八名）  
 内訳 成蹊小学校から一二三名（内女子 二三名）  
 外部から 一四二名（内女子 三五名）  
 二年生 一〇名（内女子 四名）

小学校

○文化祭（十一月二日・三日）  
 内容 学習発表会、展示会、映画会、外国のこどもの話  
 ○五年秋の学校（十一月七日・八日）  
 箱根成蹊寮で実施  
 ○入学試験（十一月三十日・十二月一日）  
 志願者数 合格者数  
 男子 二〇七名 八四名  
 女子 七六名 四二名  
 合計 二八三名 一二六名  
 ○枯林忌（二月二十一日）  
 校内放送で校長から枯林忌の記念講話があった。  
 ○ひなまつり学芸会（三月二日）  
 体育館で一、二年ひなまつり学芸会を開き新一年入学決定者を招待した。  
 ○器楽クラブ発表会（三月十三日）  
 杉並公会堂で第六回器楽クラブ発表会を行ない来会者多数で盛会であった。  
 ○第四十八回卒業式（三月十七日）  
 男子 一一三名 女子 二五名 合計 一三八名  
 ○入学式（四月七日）  
 一年生 一二六名（男 八四名 女 四二名）  
 四年生 一二名（男 六名 女 六名）

成蹊会

昭和三十八年十一月一日  
 昭和三十九年六月三十日

成蹊会概要

昭和三十八年度の成蹊会についての諸報告は本年二月二十一日開催の会員総会においてご承認をいただき、かつまた正会員には、詳細な資料を差し上げてございますので、ここではその概要と三十九年一月以降の要点についてご説明申し上げます。

一 会員数（三十八年十二月末日現在）

会員総数 一名  
 名誉会員（学園創立者関係） 二四六名  
 特別会員（学園教職員関係） 八、八二二名（内住所不明 一、〇一六名）  
 卒業生 八、八二二名（内住所不明 一、〇一六名）  
 一 正会員（会費納入者） 四、四七六名（内住所不明 一、一四四名）  
 二 普通会員（会費未納者） 四、三四五名（内住所不明 九〇二名）  
 合計 九、〇六八名

〔説明〕卒業生会員の種類を正会員と普通会員の二種に分け、成蹊学園の卒業生は普通会員となる。普通会員のうち会費納入者が正会員となる。正会員と普通会員の比率は（住所不明者を除く）

と）五六%と四四%の割合となっている。会費は年額会費と終身会費と二種あって、年額は五〇〇円、終身は七、五〇〇円となっている。

同窓会別会員数

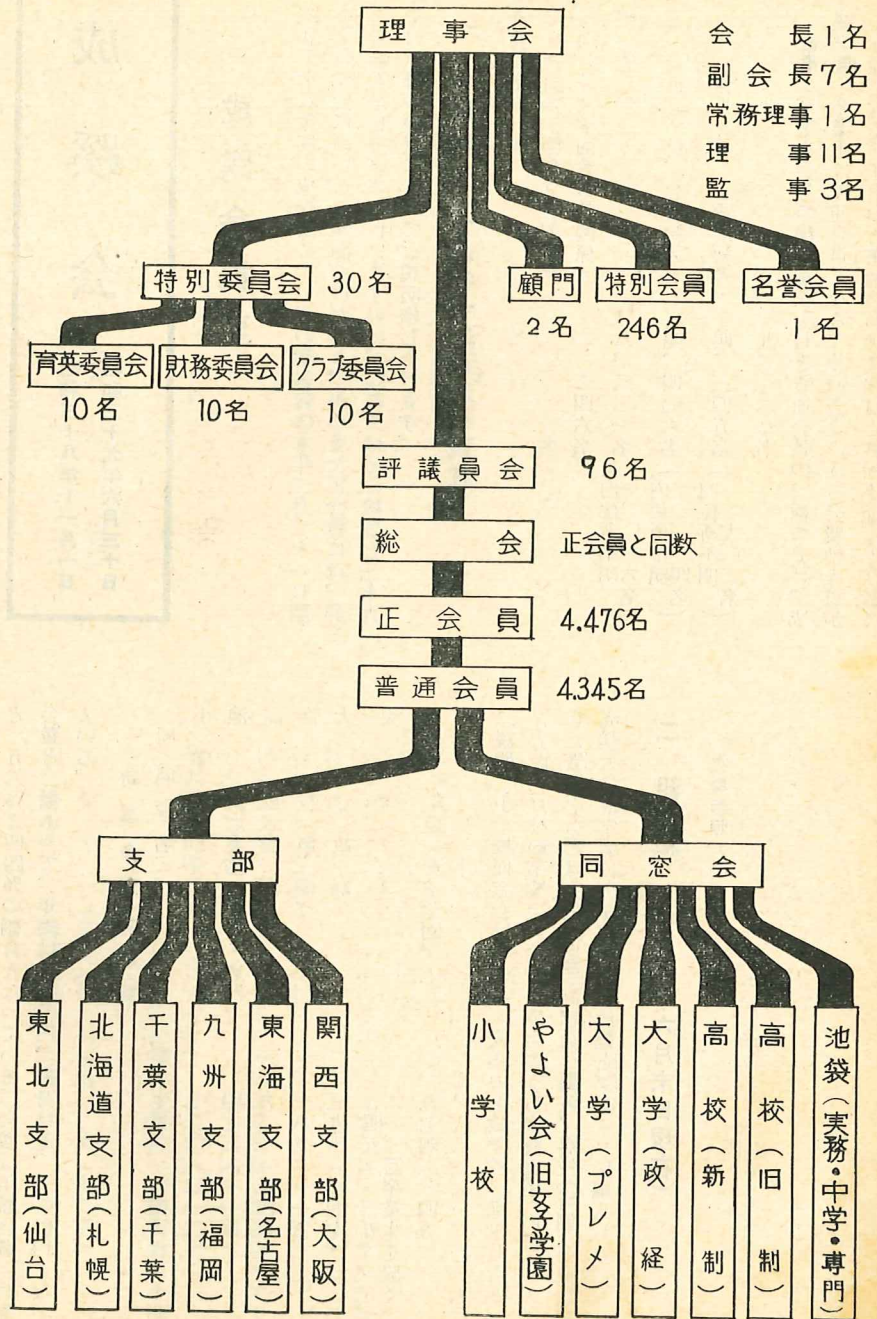
卒業生数（内は住所不明）  
 小学校 七二〇（二二二）  
 池袋（実務・中学・専門） 四七五（一一四）  
 高校（旧制） 一、九二一（三四八）  
 高校（新制） 二、一八九（一一五）  
 大学（政経） 二、三九四（二四七）  
 大学（ブレメ） 五四五（三五）  
 （一三回卒業生を除く）  
 やよい会（女子学園） 五七四（四五）  
 合計 八、八二一（一、〇一六）

二 組織（三十九年六月末日現在）

（次頁参照）



会長 1名  
 副会長 7名  
 常務理事 1名  
 理事 11名  
 監事 3名



### 三 資産 (三十八年十二月末日現在)

基本財産(貸付信託・クラブ入居保証金) 四、五〇〇、〇〇〇円  
 運用財産(株式・金銭信託) 七、七七八、一八一円  
 固定資産(什器・備品) 二五八、三一〇円  
 貸付財産(育英奨学金) 二、五三八、四〇〇円  
 謝恩顕彰基金(恩師謝恩) 五三、五〇三円  
 成蹊クラブ正味財産 三、一四〇、七二三元  
 資産総額 一八、二六九、一〇七円  
 負債 債なし

### 四 昭和三十八年度収支決算(単位円)

前年度繰越金 七、三九三、二二八円  
 歳入 二、八二四、九〇〇円  
 歳出 三六〇、八六〇円  
 基本財産収入 三四六、六九六円  
 運用財産収入 三九九、四〇七円  
 奨学金返済金 八〇、九〇〇円  
 雑収入 一二、七三三円  
 預り金 四、八〇〇円  
 臨時部 二、七〇三、〇〇〇円

1 寄付金 (二、七〇三、〇〇〇) 一四、一二六、五二四円  
 合計 一四、一二六、五二四円

### 五 事業(昭和三十八年度)

1 育英奨学費 二、一六〇、二七六円  
 2 謝恩顕彰費 二、一七五、五四五円  
 3 名簿発行費 (五三五、〇〇〇)  
 4 会誌発行費 (二二、三〇〇)  
 5 催物費 (六九八、〇〇〇)  
 6 部会・支部後援費 (五四七、七二〇)  
 7 部会・支部後援費 (九〇、〇〇〇)  
 8 部会・支部後援費 (二八二、五二五)  
 臨時部 二〇、一二、五三三円  
 1 記念碑建立費 (二八五、七三〇)  
 2 胸像建立費 (一、七二六、七九二)  
 合計 六、三四八、三四三円

#### 一 会員名簿 会誌の発行

会員名簿は三十七年度末に発行したので、三十八年度は刊行しなかつたが、その代りとして訂正版(一〇一頁)をだした。この訂正版に加えて、昭和三十八年三月卒業の大学政治経済部及び高等学校卒業生名簿並びに成蹊会役員、委員名簿を合せて発行した。支部の名簿は各支部毎に作成し支部地区在住の会員に配付した。会誌は第二一号(二九頁)第二二号(七六頁)を発行し、会務報